

SONRISA

# そんりさ

Vol.152



グアテマラ視察報告

コマを使って糸を紡ぐ女性たち。右から、ロサリオさん、母のドミンガさん（89歳）、娘のドミンガさん（28歳）、姉のフランシスカさん。糸紡ぎ1年生の貴重な若手ドミンガさんが「このコマは割れていてダメだわ。お母さんが使っているコマなら、具合良く紡げるんだけど…」と呟くのをよそに、他3人は黙々と手を動かしている。本文「グアテマラの織物」参照

- |    |                       |             |
|----|-----------------------|-------------|
| 02 | グアテマラ視察報告             | …… 新川志保子    |
| 09 | クラウドファンディング報告         |             |
| 10 | グアテマラ織物「茶綿の物語」        | ……石川智子      |
| 12 | コロンビア・年齢を知らない子どもたち    | …… 北澤豊雄     |
| 17 | エクアドル・社会運動に敵対する「市民革命」 | ……一井不二夫     |
| 19 | マルティン・ゲバラ初来日 「神話」の暗部  | ……松枝 愛      |
| 20 | ペルー音楽「トロマタ事始」         | ……水口良樹      |
| 22 | メキシコの食「南瓜クリームスープ」     | ……ミゲル・アクーニャ |
| 23 | ニュースクリップ              | ……サザエ       |

# グアテマラ視察報告

新川志保子

2月9日より18日までグアテマラ視察を行いました。10日より16日までは、カトリック大阪大司教区シナピス子ども基金からの視察団に同行しました。

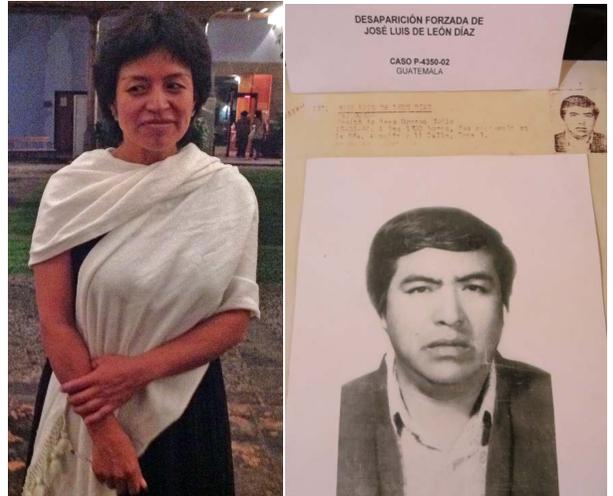
レコムが活動を始めたのはグアテマラがまだ内戦中のことでした。そして当時まだ続いていた体系的な人権侵害と、平和と正義を求めて闘う人々の存在を知ったことで、グアテマラを活動の中心に置いたのです。

それから20数年が過ぎましたが、今回視察に訪問した場所はすべて内戦の暴力が吹き荒れたところです。これまでも「そんりさ」などを通じてグアテマラ内戦とその後の状況についてはお知らせしてきましたが、今回の訪問は内戦の暴力がもたらした深い傷と、それを癒し、正義を求め、よりよい社会を作っていくためのたゆまない努力をあらためて確認する機会となりました。

## 強制失踪—ルイス・デ・リオン記念館

### (サンファン・デル・オビスポ)

グアテマラの古都アンティグアからすぐの村サンファン・デル・オビスポはグアテマラで最も有名な詩人・作家の1人であるルイス・デ・リオンが生まれ育った町です。ルイス・デ・リオンは貧しい先住民家庭の出身で、苦勞して学校に行き、大学で教えたり、故郷の村で子どもたちに教えたりする傍ら詩や小説を書きました。若いときから社会の矛盾に気づき、それを変革するための活動に参加します。そのために軍の標的になり、1984年に軍諜報機関によって拉致され、その後行方がわからないままです。グアテマラではルイス・デ・リオンのように内戦中に軍によって強制失踪させられた人々が5万人から6万人いると言われていています。いまだに行方がわからない人も多いのです。遺体も見つからず、したがって埋葬することも、お葬式を出す事もできず、遺族にとってはずっと苦しみが続きます。ルイ



⑥ルイス・デ・リオンさんが失踪時に携帯していた身分証明書の写真。軍の機密文書に貼付けられていた ⑥娘のマヤリさん

ス・デ・リオンの場合は、1999年に破壊されたはずの軍機密文書の一部が見つかった時に、彼の名前と写真があって、拉致され拷問の上に殺害されたことが判明しました。が、遺体は見つからないままです。

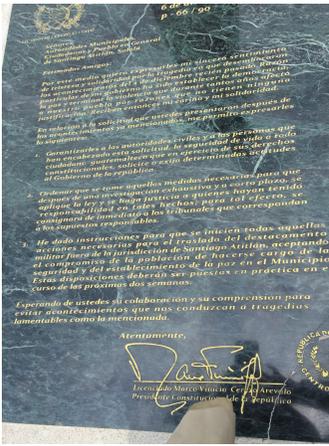
ルイスの生家が10年ほど前から記念館となって公開されています。記念館を作り運営しているのは娘のマヤリさんです。父親だけでなく、グアテマラ内戦で行方不明にさせられたすべての人のために、そして内戦を知らない若い世代に内戦の歴史を知ってもらうためにこの記念館を作りました。マヤリさんは、記念館だけでなく、お父さんの遺志を継いで、町に図書室を作り、子どもたちのためのマリンバやギターの音楽教室も運営しています。

## 虐殺—そして軍を追い出す

### (サンティアゴ・アティトラン)

サンティアゴ・アティトランはグアテマラ最大の風光明媚なアティトラン湖に面したマヤ・ツトゥヒル人の町です。レコムはこの町にある障害者施設「サンティアゴ・アティトラン・障害者とその家族・友人の協会」ADISAを通じてビーズ製品を仕入

㊦ 平和公園に設置された政府との協定の石碑 ㊦ ADISAのホセさん  
 ㊦ ADISAの職業訓練プログラムで作業中の男性



れて、日本で活動資金捻出のために販売しています。

このADISAで障害者の経済的自立を目指す職業訓練プログラムの責任者で、自身も車椅子の障害者であるホセ・ソソフさんに話を伺いました。

さて、ホセさんは、1990年の軍による虐殺のサバイバーでもあります。当時のことを聞かせてもらいました。内戦が激しくなっていた1980年、このサンティアゴ・アティトランにも軍がやってきて町の入り口近くのコーヒー農園を接收して駐屯地にしました。そこから毎晩のように兵士が町に侵入し、ゲリラ狩りをしたそうです。時には軍兵士がゲリラを装って住民を殺害したこともあるとか。また、ゲリラと無関係の市民も拉致されたり殺されたりしたそうです。1990年12月2日の夜、兵士の一団が町にやってきて、ある一家の全員を拉致して駐屯地に連れて行ったそうです。その家族を解放してもらおうと町の人々数千人が駐屯地まで出かけました。もちろん人々は武器などもっていません。そこで軍が人々に発砲を開始。人々は逃げ惑い大惨事になりました。そして13人が殺されたのです。最小年は9歳の少年でした。そして多くの人が重傷を負ったのです。

町の人々はすぐさま1万5千人の署名を集めて政府やメディアにこれを訴え、事件の真相究明と軍の立ち退きを要求しました。政府も交渉に応じざるをえなくなり、サンティアゴ・アティトランから軍を撤退させることに同意し、町の治安は町の住民に任せることを約束したのです。もともとサンティ

アゴ・アティトランは住民自治の強いところで、コミュニティの男性がグループを作り交代で夜の見回りをする伝統がありました。以来今日にいたるまで町とその周辺に軍の存在はありません。虐殺の現場は、現在平和公園になっています。そして13人が殺された場所にはそれぞれその名前と年齢を刻んだ記念碑、そして政府との協定書を刻んだ石碑が置かれています。

ホセさんは当時16歳、皆と一緒に出かけて撃たれました。腰と背骨に銃弾を受け、生死の境をさまよいました。が人権団体の支援があり米国に一年滞在して手術と療養を行いました。そして下半身不随の車椅子生活になったのです。当時のサンティアゴ・アティトランでは障害者は家にこもり外には出ないのが普通だったそうで、車椅子で町に出たのはホセさんが初めてだそうです。米国にいた時障害者が暮らしやすい工夫が街のあちこちにあるのを見、さらに自身も車椅子生活となって、故郷のサンティアゴでも障害者が社会に出る必要を痛感したそうです。そしてADISAにも参加するようになったのです。ホセさんは今年41歳、結婚して2人の子どもの父親です。1990年の虐殺については、被害者として現在はもう怒りも通り越して落ち着いた気持ちでいるが、あのような暴力は決して繰り返されることがあってはいけないのだ、と力強く話してくれました。

ADISAは1990年に創設され、現在は専従が7人います。職業訓練プログラムには現在17人の若者が参加していて、古紙を利用した籠やアクセサリーな

どを制作しています。残念ながらまだ製品の売り上げで生活ができるまでにはいたっていませんが、彼らの活動を通して町での障害者に対する差別や「特別視」が減っているということです。また、数は少ないものの車椅子でも通れるように階段の道をランブにしてもらったところもあるそうです。

ADISAの隣は障害を持つ子どものための学校（公立）があります。現在は生徒が幼児から中学生まで70人おり、教師は常勤が3人います。このような障害者のための学校はまだとても少なく、サンティアゴ・アティランは先駆的な自治体となっています。それもADISAやホセさんたちの努力のたまものでしょう。

## 夫を殺された女性たち—グアダル—ペ協同組合（サンホセ・ポアキル）

レコムが2010年から支援を始めたチマルテナンゴ県ポアキルのグアダル—ペ共同組合は、内戦で夫を殺されたマヤ女性たちが生き延びるために集まって作られた団体です。ポアキル—帯も内戦の暴力が吹き荒れました。夫を軍に殺され、殺戮を逃れて子どもを抱えた女性たちが着の身着のままポアキルの町に逃げてきたのです。教会の前の公園に皆で集まって夜を過ごし、教会や修道会などの援助でなんとか数日を過ごしました。それでも500人、600人もの女性たちが食べて行くのは容易ではありません



㊦グアダル—ペ組合訪問時の子どもたちによる歓迎会 ㊧グアダル—ペ組合 マイクロクレジットを受けて織り物をする女性



ん。しかも、女性たちの誰もスペイン語が話せず、いたるところで困難がありました。彼女たちできることと言えば、織り物を織ることだけだったので、織ったものや、それで作った民芸品を売って、なんとか飢えをしのいだのでした。他の団体からの支援を受けたり、民芸品の売り先が増えたりして、少しずつ生活を安定させて行くことができました。軍がはいつも監視しており、軍の許可なく大勢で集まることはできなかったそうで、しばらくは恐怖が続きました。そのうちに女性たちの組織化をすすめ、協同組合を設立しました。織り物だけではなく、メンバー女性たちの住居建設や農業支援、薬草、子どもたちが学校に進めるための奨学金や文房具の提供などのプロジェクトも広げて行きました。最近は女性たちの経済的自立のためのマイクロクレジットなども行っています。現在はポアキルと近辺のコミュニティに約200人のメンバーがいます。

## ジェノサイドと「抵抗の共同体」—マルセリーノ・カノさん（ネバフ）

視察の最後はキチェ県のネバフです。ここは首都から北西方向に車で5時間ほど行った場所にあり

ます。ネバフとチャフル、コツアルという三つの主要な町をあわせてイシル三角地帯とも呼ばれ、マヤ・イシルの人々が住む地域です。最近道路が整備されてアクセスが良くなりましたが、山の中で、以前はアクセスが難しい地域でした。この一帯は内戦が最も激しかったところで、軍による「焦土作戦」という皆殺し戦略が繰り返されました。（内

戦とイシルの人々については「そんりさ」143号のジェノサイド裁判を参照）

ここではジェノサイドを生き延びて、その後山中に避難した人々が組織して作った「抵抗の共同体（CPR）」に入り、そこで12年暮らしたマルセリーノ・カノさんにお話を伺いました。

## マルセリーノ・カノさんの証言

私はネバフ郡の小さな村ビホロムで1959年に生まれました。私が子どもの頃は舗装道路もなく、バスもなく、ネバフの町に行くには山道を7時間歩かねばなりません。家が貧しかったために小学校も卒業できませんでした。母を手伝って近隣の村の市に収穫物を売りに行かなければならなかったからです。13歳の時にカトリック教会のアクション・カトリカ（布教活動を行うと共に住民の識字運動や意識化の活動などを行う、後に協同組合や土地獲得など農民の経済的自立のための活動も行うようになった）に参加するようになりました。そしてカテキスタ（神父を助けて教理を教える人）にも任命されました。

イシル地域は辺境の地で、土地も豊かではなかったために、人々は僅かな現金収入をえるために低地のコーヒーやサトウキビ、綿花などのプランテーションに出稼ぎに行かざるを得ませんでした。プランテーションでの労働は過酷で環境も非人間的なものでした。そんな中で70年代になってアクション・カトリカは地域の生活を向上させ、収入を増やすためのいろいろな生産プロジェクトなどをコミュニティに導入し始めました。私は養蜂の協同組合に参加しました。

### 内戦が激しくなり、「焦土作戦」へ

その頃、イシル地域ではゲリラの存在が大きくなって行きます。一帯の大地主をゲリラが殺害す



るといふ事件も起こりました。そして人々の組織化も始めていきます。土地の獲得や貧しい人々に教育や医療を、というゲリラの主張に多くの人々が共感しました。そして、ゲリラの主張とアクション・カトリカの教えとは共通する部分が多かったこともあり、軍はゲリラとアクション・カトリカやコミュニティのリーダーを同一視するようになります。彼らはブラックリストに載り、拉致され拷問死体で見つかるようになるのです。コミュニティの中に恐怖が広がって行きました。やがて選別的な殺害から無差別の虐殺へとエスカレートして行きました。一帯の村々に軍が夜やってきて家に火を放ち、畑を焼き、家畜を殺しました。軍は「魚（ゲリラ）を殺すには水（人々）を干上がらせる」と言って、ゲリ

ラと関係がある無しにかかわらず人々を無差別に殺すようになって行くのです。殺戮を逃れた人々は山中に逃げ込むしかありませんでした。だが、そこでも軍の追跡や爆撃が続いたので

す。軍のやったこととはとても比較にはなりません。ゲリラもひどいことをしました。一帯で最初に自警団（PAC）を組織したチャカルテという集落はそのためにゲリラに襲われ住人が皆殺しにされました。人々を煽動して巻き込み、軍が大攻勢をしかけると人々を置き去りにして逃げたのです。

## 妻と息子が殺される

私の村も軍によって破壊されました。その頃私はもう結婚していて子どもも1人生まれていました。私たち家族は親戚と一緒に殺戮を逃れて山の中に逃げました。軍による追跡は続きます。ある日、幼い子どもを連れた妻と他の親戚が食糧調達に出かけたまま帰ってきませんでした。その日私は隠れ家になっていた洞窟の見張りをしていたため別行動だったのです。必死になって探したあげく、妻と子ども、叔父など7人が殺害されているのを発見しました。そこになんとか埋めるのが精一杯で埋葬もできませんでした。1983年のことでした。妻の名前はセナイダ・エレラで20歳、息子はペドロ、2歳半でした。

その頃には、ネバフ周辺の全ての村が破壊されていました。もう村には住めず、かといって山中では飢えと恐怖に苦しめられ、耐えられなくなって軍に投降する人も出てきました。投降した人たちは戦略モデル村と名付けられた集落に住まわせられ、徹底した軍のコントロール下におかれたのです。「洗脳」といって反ゲリラのイデオロギー教育があり、軍の検問を通らなければ村の出入りはできず、持ち物も厳しく検査されました。

ネバフの町では、教会も軍に占拠され、そこにたくさんの人が連れ込まれ拷問されて殺されたのです。自分が助かるために進んで軍に協力する人もありました。あるいは個人的な恨みをはらすために密告するようなこともあったのです。

## 「抵抗の共同体」、続く軍の攻撃

山中に残った人々は生き延びるために組織し、「抵抗の共同体」を作りました。軍の攻撃に備えて見張りをし、過酷な条件の中でトウモロコシを植えたりしました。水も塩もありませんでした。塩が摂取できなくなって、身体がむくみました。村に下りて行く事も危険でできなかったのです。餓死する人も病気になる人も出ました。

軍による追跡や爆撃も続きました。爆撃だけでなく、掘った井戸に毒を入れる、死体の下に地雷を埋めてその死体を引き取ろうとした人たちも殺す、毒を入れた塩を置いておく、などさまざまな方法で人々を殺そうとしたのでした。お産の最中に軍に襲われて、お腹を引き裂かれて殺された女性もいました。捉えられた人たちは生きのまま焼かれました。女性は強かんされ、殺された後に裸で木に吊るされました。

グアテマラにはジェノサイドなどなかった、という人がいます。しかし、ジェノサイドは確かにあったのです。

家族を無惨に殺されて、私は悲しみと怒りをこらえられませんでした。絶望に打ちのめされ、激しい怒りで、軍に復讐しようとゲリラに入りました。が、数カ月たっても家族を失った悲しみは深くなるばかりで、他のことは考えられませんでした。これは自分がやりたいことではないと気づき、ゲリラを出ました。かといって村にも戻れず、抵抗の共同体の話聞いて、その一つサンタ・クララ共同体に行ったのです。最初はそれほど人数ではなく、なんとかやって

いましたが、数年すると逃れてくる人が増え、1987年には軍の攻勢が激しくなりました。再び収穫が焼かれ、軍の警戒が厳しくて、村に下りることもできなくなりました。そのため衣類や履物、塩などがまったく手に入らなくなったのです。このような厳しい条件でしたが、私たちは連帯し、協力しあって住民組織を作り上げていました。

私のいた抵抗の共同体は、司祭もいなかったもので、子どもが生まれても洗礼を授けることもできず、また結婚式もあげることができませんでした。私ともう二人がカテキスタだったことを知った共同体の人たちからぜひにと頼まれ、行うことになりました。人々から要請されてやっていたのですが、心の底では、資格もなく、司教から許可を受けているわけでもないのに、心の負担になっていました。そのうちに、当時のキチェ司教であったフリーオ・カブレラ司教に手紙を書く機会があり、抵抗の共同体の状況とやむなく自分たちが神父の代理として行っていることを説明し、許可を求めたのです。3カ月ほどしてから司教から返信があり、自分が行くことができない山中でそのような活動をしていることへの感謝と、今後もぜひ続けるようにと支援と励ましの言葉がありました。それで心底ほっとしたものです。

## 「抵抗の共同体」の存在を公表

そんな中、1990年になると軍による弾圧はさらに厳しくなり、これ以上この生活を続けるのは困難になりました。そしてわれわれの存在を公表すべきだという結論に達したのです。教会関係の支援を得て、9月に抵抗の共同体の代表を首都に送り記者会見をし、声明を新聞やラジオに出しました。ところが、そのすぐ後に、国内避難民の調査をしてその報告書を出した文化人類学者のミルナ・マックさんが殺されました。それまで知られていなかった抵抗の共同体の存在

が公になることは軍にとっては都合が悪かったのです。そしてその責任がミルナさんの調査にあると思ったのでしょう。同時に抵抗の共同体への爆撃も激しくなりました。

けれども、存在が公表されたことで、グアテマラ国内だけでなく国際的にも私たちの存在が知られるようになり、状況はだんだんと変わって行きました。軍の攻撃も下火になり、外からの支援も入り始めました。私たちも近隣の町や村に親戚や知人を訪ねることができるようになりました。

## ネバフへ

抵抗の共同体にいる間に現在の妻と再婚し、その後5人の子どもに恵まれました。そして1995年に家族とともに抵抗の共同体を出ることに決めました。政府とゲリラによる和平交渉が進んでおり、内戦終結のめどがたったところです。ネバフの町には兄弟がいたので、そこを頼って行きました。ネバフに着いてまず最初に、学校に通いました。がんばってなんとか中学まで終えました。私の兄弟で中学まで出たのは私が初めてでした。現在、私の上の息子たちは教師になったり、技師になったりしています。子どもたちを上为学校にやれたことは私の誇りです。

## レミー・プロジェクト

ネバフではフリーオ司教に誘っていただき、教会の仕事をすることになりました。ちょうど歴史的記憶の回復（レミー）プロジェクトが始まったところでした。レミー・プロジェクトはカトリック教会が推進しました。内戦中の人権侵害についての証言を集めて真相を究明し、同時に人々の傷を癒し、和解を促進しようとするものです。まだ和平協定調印の前で、軍の施設もあちこちにあり、自警団も活動していたので、人々の証言を聞き、録音するのは危険を伴うこ

とでもありました。それでも、多くの人にとって自分と家族に起こったこと、内戦の暴力とどのような苦しみを味わったかを語る事ができる初めての機会、とても重要なことでした。そうして集められた証言は1998年4月24日、4巻の報告書にまとめられました。けれどもその2日後にこのレミー・プロジェクトの生みの親であるファン・ヘラルディ司教が暗殺されたのです。

## 秘密墓地の発掘

ネバフに着いてから頭を離れなかったのが、殺された家族の遺体を発掘してきちんと葬式を出し墓地に埋葬するということでした。それで教会の神父に相談し、遺体の発掘の準備を始めました。回りの人に話をすると家族を殺された多くの人たちも私と同じように遺体を発掘したいと願っていることがわかりました。それで、教区としてこの秘密墓地の発掘をすることになったのです。作業は2000年に始まりました。場所が確定できたのは120人分で、なかでも私の家族は、山中の最もアクセスが困難なところにあ

るため最初に発掘することになりました。発掘が始まり、妻と息子の着ていたものが出てきた時には、当時が再びよみがえり、悲しみと怒り、助けることができなかったという苦悩に苛まされました。何日も苦しんだあげく、「遺体の発掘」ではなく「家族との再会」と呼ぶべきだと思いつき、それを皆に提案しました。それで気持ちが前向きになり、他の遺族にも同行してあちこちの作業を続けました。そして最終的に2001年7月29日にネバフで大きな再会のお祝いをし、遺体を埋葬することができました。以来毎年7月の最終土曜日は犠牲者の日として記念行事を行っています。

現在、私は教会のラジオ局の仕事をしています。ラジオ局の名前は「ネバフの声」で、2002年からイシル語とスペイン語の放送を行っています。ラジオの経験は全くありませんでしたが、ラジオ放送というメディアはとても気に入っており、私の天職だと思っています。私をずっと支えてくれた家族、フーリオ司教や教会関係者には本当に感謝しています。

# 土曜学級支援のクラウドファンディング報告

グアダルーペ組合が行っている子どものための土曜学級プロジェクトのために昨年12月26日より60日間クラウドファンディングを行いました。クラウドファンディングとはインターネットを介して不特定多数の個人に呼びかけ資金調達を行うものです。サイトの運営会社を通じて、個人やグループがプロ

ジェクトを提案し、それに共感する人がお金を出す、というものです。レコムが使ったのはREADYFOR(レディフォー)というサイトで、目標金額を設定し、期間内に目標額が達成できればそこから手数料を差し引いた金額が受け取れるというものです。

土曜学級は、2012年よりカトリック大阪大司教区のシナピスコども基金からの支援を受けてグアダルーペ組合が開いています。クラスは3カ所があり、それぞれに30人の子どもを受け入れて始まりました。各クラスに教師が1人いて、スペイン語と子どもたちの母語であるマヤ・カクチケル語の2言語で授業をします。そして、栄養不足の子どもたちのために給食も提供しています。支援額は毎年100万円、2016年まで続きます。



「土曜学級」の子どもたち

グアダルーペ組合は昨年・一昨年と予算を切り詰め、民芸品収入などを土曜学級に回したりと、努力を重ね、2014年は87人の子どもを受け入れてなんとか終わることができました。しかし、干ばつなどによる物価の高騰と、円安のために送金額が3分の1ほども目減りしてしまい、2015年は送金額を増やさなければ予定通りの子どもを受け入れることは到底無理となったのです。ちょうどその時にクラウドファンディングの運営会社からお誘いがあり、試みることにした次第です。

とはいえ、運営委員会ではクラウドファンディングの経験がある人は誰もおらず、右往左往しながら説明文や写真を準備したのです。そして、このプロジェクトを広く知ってもらうためにtwitterやFacebookなどのソーシャルメディア、メールなどで宣伝に努めなければならないということで、あわててレコムでtwitterのアカウントを作ったりしたのでした。

またこのレディフォーの方式は「購入型」のクラウドファンディングで、寄付や投資とは異なり、プロジェクトの実行者は、お金を支援してくれる「支

援者」に対して、リターン（引換券）をお返しするという形を取ります。つまり、金額に応じてこちらが引換券を設定し、それを購入してもらうということになります。何を引換券にするかは内部で相談し、土曜学級の子どもたちによるお礼状や、レコムで販売しているグアテマラの民芸品やアルテマヤ・カレンダーなどを使うことにしました。

いよいよ12月26日の開始日になりました。ドキドキしながら一日に何度もページを開いてみます。翌日から1件、2件と「購入」があってホッとしました。その後も順調に進み、1月14日には目標額に達しました。最終的に期間満了の2月24日には52万5000円が集まり、105%の達成率となりました。グアダルーペ組合には目標額達成の時点で連絡し、これで予定通り3クラス合計90人の子どもを受け入れることができました。

プロジェクトに参加していただいた皆さま、そして宣伝などで協力していただいた皆さま、本当にありがとうございました。また、グアダルーペ組合からもこのクラウドファンディングに協力いただいたすべての方に心よりの感謝の言葉が届いています。

#### クラウドファンディング支援者一覧（敬称略）

【支援額10万円】 島谷直子 安藤操

【同3万円】 渡邊秀明 赤羽敬治

【同1万円】 播磨由紀子 松田裕子 いなだ多恵子 仰木ひろみ 石原等 松川ひとみ 山崎範子 森まゆみ 吉川真由美 藤井満 宮脇眞子 高石まふみ 菊池豊 恩田恵幸 岸上英二 杏さだ子 船田さやか 匿名希望2名

【同3千円】 氏名は省略させていただきますが、25名の方からいただきました。

# グアテマラ織物

# 茶綿の物語

石川智子



サン・ファン・ラ・ラグーナ村。  
天然染色織物の店が軒を連ねる

ここはアティトラン湖畔のサン・ファン・ラ・ラグーナ、マヤ系ツトゥヒルの人々が暮らす静かな村。最近では、天然染色織物の村としても知られるようになってきた。

この地で、丹精して育てた綿を摘み、紡ぎコマを使って根気良く糸に紡ぎ、後帯機で織りあげる女性たちがある。綿の色は、白から濃い茶色まであり、白綿の糸は天然染料で染めることもある。

綿の木には有機肥料を施し、無農薬で育てている。糸紡ぎや織りに使う道具は、木の棒に少し手を加えた程度の原始的なものばかり。こんな仕事の形は、千年、2千年前と、きっと大きく変わらない。

綿は、大昔からマヤの人々が育て、利用してきた大切な繊維。

その綿が商品作物として大規模に生産され始めたのが1940年代末のこと。高地のマヤ農民が季節労働者として低地の大農園へ赴き、劣悪な環境下でその生産を支えた。繊維の短い茶綿は機械で紡績できないため、産業上利用価値無し、とされた。その後、農薬の大量投入による弊害や世界市場価格の下落などにより1980年代に入ると急速に放棄され、

商品としての綿の生産は、30年余りで消えた。現在まで糸のほとんどを輸入に頼ってきている。

しかし、マヤの人々の間では、綿は今も生き続けている。

「どの仕事も祖母や母がずっとやってきたことです。私たちは小さい頃から、それを手伝いながら覚ええました。昔はどの家でも、綿を育て、糸を紡いで織るのが当たり前でしたから」

糸紡ぎのコマを廻す手を休めて、ロサリオさん(54歳)が話してくれる。

綿の木は、日当たりの良い、広々とした場所を好みます。

肥やしには、鶏糞やアリの糞などを入れています。私の祖母は、ボロボロになった衣服も肥やしにしていました。その頃の衣類は純粹



手紡ぎの糸を後帯機で織る女性。糸の状態や織りのタイプにより、タテ糸を糊付けしてから織る場合もある

な綿だったからですね。

そして大切なのは剪定。古い枝を払い、その後新しい枝が5本伸びてきたら3本は切る。そうすると順繰りに実をつけ、一年中綿が絶えません。

収穫した綿は、ゴミや種を取り除き、棒でたたいたり、少量なら手のひらでたたいたりして、繊維をほぐしてからコマで紡ぎます。

手間がかかるのは茶綿ですね。繊維が種にしっかり食いついていて、種を取り除きにくい上、繊維がとても短いので、撚りを強く掛けて紡ぎます。

私たち5人姉妹のうち、今も3人が自分で育てた綿を紡いで織っていて、それぞれが天然染色織りの女性グループの店を構えています。でも、ほとんどの織物は、購入した機械紡ぎの糸を使ったもの。手紡ぎ糸はゆっくり丁寧に織らないと糸が切れたりするし、慣れていない人や、さっさと織り上げたい人には、面倒

なのでしょう。他に糸を紡げる女性もいないので、手紡ぎ糸の織物は極少数です。

ロサリオさんの自宅の庭先には、白、ベージュ、薄茶色の綿の木が数本植えられている。十分な土地が無いので、濃い色の茶綿までは植えられず、よその村から購入している。

また、限られたスペースを活用して、ウチワサボテンを植えて赤染料のコチニールを飼育し、藍草や草花などの染料も育てている。

将来、山の日当たりの良い傾斜地に土地を持つことができれば、この庭の綿の木やウチワサボテンなどを移植し、増やしていきたいと言う。

今この村で一番の糸紡ぎ名人は、ロサリオさんの母で89歳のドミンガさん。

「10歳の頃から、祖母や母に教えられて綿を紡ぎ始めました。女性のウィピルも、男性のシャツやズボンも、みんな手紡ぎ糸で織ったものです。部分的に少しだけ使う糸は、天然染料で染めたものもありましたけど、よそから売りに来る糸を買ってもしました。

私の世代の女性たちは、もうほとんどいません。私ももう、長くは続けられない。もっと若い人たちに、糸紡ぎを教えてあげたかったのにね。でも、私は娘たちにしっかり教えたから、後はこの人たちがやっていってくれるでしょう。」

ロサリオさんは、娘のドミンガさん（28歳）に1年ほど前から糸紡ぎを教えている。

「もう、大分うまく紡げるようになったのよ。」と私に言う娘の手元を見て、ロサリオさんは「う～ん、もうちょっとね。」と笑った。



ロサリオさんと庭の綿の木。「これと一緒に撮って！」と持って来たのは、摘み取った白綿がたくさん入った籠。綿の木の下にウチワサボテンを植え、コチニールを育てている

# コロンビア 年齢を知らない子どもたち 北澤豊雄

サッカーW杯ブラジル大会で初のベスト8進出を果たしたコロンビアは、近年、経済も好調だ。かつては麻薬やゲリラといった負のイメージが強かったものの、2011年のGDP成長率は6.59%。週末ともなれば首都ボゴタの繁華街の路上には着飾った男女が溢れ、その脇をベンツやBMWが行き来している。だが地方の山間地に足を踏み入ると景色は一変。自給自足と物々交換を主体とした生活が営まれていた。

うだるような暑さに耐えながらの山の小道を抜けると、目の前の光景に胸騒ぎを覚えた。青みを帯びた澄んだ空の下

に、薄汚れた白装束に身を包んだ子どもたちが駆けていた。乾いた大地の上にはトンガリ帽子のような茅葺きの民家が点在している。その回りを楽しげな表情で走る素足の子どもたちはカナブンを捕まえようとしていた。



「今夜のごはんにするんだよ」

そう語る浅黒い肌の少年はコギ民族のレオ君=写真=だが、年齢を問うと首を傾げた。コロンビアの公用語のスペイン語がまだおぼつかないのかと思いきや、私をここまで連れてきたガイドの男性が苦笑しながら声をひそめた。

「知らないんだよ、自分の年齢を。知る必要もない」



ここはコロンビア北部の山中だ。カサクマケ村という。グアヒラ県に位置しているが、マグダレナ県とセサル県との県境付近でもある。日本でいえばちょうど長野県と岐阜県と愛知県にまたがるような場所だ。

コギはコを強めに発音するコロンビアの先住民である。彼らはコットンと呼ばれる白装束の民族服に身を包み、スペインの植民地支配が色濃い16世紀に追っ手を逃れるように山の中へ潜っていった。以来、今日までほぼ変わらぬ生活形態を保ち、その末裔たちが今もコロンビア北部のサンタマルタ山脈に点在している。コギの総人口はコロンビア全土でおよそ1万人。サンタマルタ山脈の裾野に位置するこのカサクマケ村には約70人が住んでいる。

私が彼らに興味を持ったのは、首都ボゴタに住んでいるときだった。ある日、ボゴタの国内線の空港内を歩いていると、白装束の男が前から歩いてきて、近づくにつれて視線が絡み合った。男は白い山高帽をかぶり、肩からぶら下げたバッグの中に手を突っ込んでいた。コカの葉を鷲づかみにしてバリバリと噛んでいたのである。近年のボゴタは都会だ。キャリーバッグを引きながら着飾った服で颯爽と歩く人々をあざ笑うかのような態度だった。そんな彼らの故郷をいつか訪ねてみたいと思っていたのである。

2013年4月。コロンビア北部へ行く用事ができた私は、まずはボゴタからバスで北上しておよそ18

時間、カリブ海に面する人口約45人の商都サンタマルタに向かった。コギの人たちに出会うための起点となる大きな街だ。

歩いているだけで汗が噴き出してくるサンタマルタで情報収集をしていると、冷房が壊れたバスの車内で、「私の母親はコギの人たちにスペイン語を教えていた」と笑顔で語る素敵な女性に出会った。そんな彼女に導かれるようにして辿り着いたのが、サンタマルタからバスで東へ約2時間、カリブ海と山に挟まれた人口約5千人の狭隘な町だ。グアヒラ県パロミノ。コギにスペイン語を教えた経験を持つパトリシアさんに出会った。来意を告げると彼女はにっこりと微笑んで教えてくれた。

「ここから徒歩で10時間ほどかけて山をのぼると、カサクマケというコギの集落がある。よかったら行ってみる？」



## 物々交換をしてよそ者を受け入れ

自分の年齢を知らないレオ君に案内されながら農作業中の首長、レオナルド=写真上=にも会った。黒々とした髪を肩まで垂らしている彼にも年齢を尋ねてみた。「200歳ぐらいかな」。ユーモアのある人たちなのだろうか。そう言ってぎこちない微笑を浮かべたものの、値踏みするようにじっと私を見つめて警戒の色を宿していた。



レオナルドは柿色のヒョウタンのようなものを手にしていた。ポポロと呼ばれる木製の容器=写真上=で、中には貝殻を潰した白い粉末が入っていた。容器の入口に棒を差し込み、棒の先端に粉末をつけたものを舐めるのである。カリブ海で採れるこの貝殻の粉末を舐めていると空腹が満たされたり、エネルギー補給にもなるのだという。

試しに舐めさせてもらった。苦さが口の中に充満して、しばらく後味が残ったままだった。ポポロは一般的には大人の男性が使う物で、一人前の男性になった証として首長から授かる。そのための儀式もあつたりする。いわば元服のようなものだが、この村では女性も子どもも使っていた。集落によって事情は違うのだろう。

ほかに彼らが所持しているものとしては、後述するモチラと呼ばれる手編みバックがある。遠くへ農作業に出る男性の中には、このバックの中に熱した石とコカの葉を入れている者もいる。こちらもやはり空腹用とエネルギー補給である。

コギ語は、例えば「ありがとう」をアンチベン、「こんにちは」をニュムイと言う。村人の大半はスペイン語を話すか、人によって温度差があり、なかには挨拶程度しかできない者もいる。そのため村から10時間ほどかけて町に降りたとき、言葉ができない者は騙されやすいのだという。町で買い物をしたときに釣り銭をごまかされたり、偽札をつかまされたりすることもあるのだとか。

カサクマケ村には学校がないため、子どもたちは山の麓の学校まで行く。パロミノまでは行かないも

の、徒歩で5、6時間ほどはかかる。ゆえに平日は学校に泊まり込みをして、週末のみ村に帰る。学校は無料だが家庭の方針によっては行かせない親もいる。子どもたちは大切な労働力だからだ。

レオ君と共に村を歩く。風はなく、暑熱が重々しく充満している。首筋に次から次へと汗が流れてくるが、少年の褐色の肌は乾いたままだ。10歳ぐらいだろうか、多少のスペイン語を話す学校には行っていない。歩きながら輝くばかりの緑の海を指さして村の農作物を教えてくれた。

「これはプラタノ（食用バナナ）、あれはニヤメ（山芋）、マンゴー、レモン、パイナップル、バナナ」

炭火の煙に釣られるように、一軒の家に入った。家といっても四方の柱の上に厚い茅葺きを乗せただけのものだが、囲炉裏があり、大きな葉っぱに包まれた物が火にあぶられていた=写真=。そのかたわらで編み



物をしているレオ君の母親のマリアさんがうつむきながら抑揚のない声で言った。

「ニエケというんだよ。灰色の小さな犬のような動物でこのへんではご馳走なんだよ。朝の狩りで旦那が捕まえてきた。夜になったらおいで。食べさせてあげるから」

とはいえ、夜になって行くと、すっかり平らげられていた。そのうえレオ君の父親は星空の中で何かを喚きながら酒臭い息を振りまいていた。電気のない村である。プラネタリウムのような星明かりの下で父親はグアラポと呼ばれるサトウキビから作った酒を煽っていた。甲走った声を上げて首を振ってい



る。「ういー、ういー」。呼応するかのように周囲の虫の鳴き声もより一層大きくなっていく。人里離れた村でもいろいろなストレスや鬱積はあるのだろう。

彼らとの関係がまだ出来ていないせいか、村人の家での寝泊まりは禁じられた。ガイドの中年男性と共に村の隅にある空き家をあてがってもらい、町から持ってきたハンモックと蚊帳を吊した。そんなときだった。20代から30代の女性たちがやってきた。蝋燭に火をとますと、白装束の彼女たちは頭にモチラと呼ばれる手編みバック=写真上=の長い把手をハチマキのように巻き付け、山芋とバナナとアボガドを抱えていた。

物々交換の儀式である。事前にガイドから聞いていた。コギの村へ行くには、交換する品物を持っていく必要がある、と。彼らが特に必要なのはバックを編むための針と糸、それに民族服の生地だと聞き及び用意していた。手編みバックは彼らの手芸品で、コロンビア各地の土産物屋などで販売されている。



彼女たちは農作物を近くの机の上に無造作に置いた=前ページ写真下。それを見た私が自分のバッグから交換の品物を取り出すと、挨拶もなしに数本の手がすうっと伸びてきて、奪うように持っていた。

こうして儀式を済ませて眠りについたので、明け方の空は青白い閃光がひっきりなしに虚空を切つて不気味ですらあった。日中の暑さが嘘のように冷え込んでいる。ハンモックの中に持参してきた寝袋を敷いて寝ていると、目の前に得体の知れない物体が近づいてきて、私は正気を失いそうになった。

## 森の神様を呼べるという

夢ではなかった。人の顔だった。

「ああ、びっくりした」と掠れた声を出したが、胸は波打っている。私は乱れる呼吸を落ち着かせてから、目の前の顔をじっと見つめた。やっぱりレオ君だ。人懐っこい笑顔を浮かべて、「ねえ、川へ行こうよ」と誘ってくる。

空は群青色が薄くなりかけていた。きれぎれの雲のような靄が立ちこめるなか、手を引っ張られるようにして近道の雑木林を突っ切った。民族服をたくし上げてしゃがみこんだ10代後半ぐらいの少女と目が合った。瞬間的に視線のやり場に困ると、彼女は微苦笑を浮かべてきりっと締まった細面の顎をしゃくって見せた。

川ではほかの子どもたちが半身を浸かって素手で魚獲りに興じていた。地上はまだ少し薄暗く、水の中は見るからに冷たそうだった。彼らが捕まえるのはもっぱらレジャドという雑魚だが村人たちの大切な食料源である。獲れなければ朝食はないから彼らも必死だ。すでにお腹をすかせた子どももいて、川藻を掬って食べたりしていた。彼らはカナブンもカマキリも幼虫も食べる。年齢を問うと、数人はやっぱりきよとんとした表情を浮かべていた。

対岸の雑木林の入口からじっとこちらを見ている人たちがいた。2人組の青年だが、コギとは少し様

子が違った。白装束の民族服を着ているものの、コギのそれよりも光沢がかっていて服のデザインもわずかに違う。なにより肌の色が単に浅黒く日焼けしたようなコギと違い、珈琲色のように磨き上げられ、堀も深い。体の線も瘦身ぞろいのコギと違って太かった。

「あれはアルワコだ。気にしなくていい」

ふいに肩を叩かれて振り向くと、自称200歳の首長だった。彼の手は冷たくて、背筋がざわめいた。朝の野良仕事を終えてこれから水浴びらしい。首長の実年齢は50代前半ぐらいだろうか。猿顔の表情には生気があり、野性的な雰囲気は漲っている。彼は川の浅瀬に立ったままアルワコ民族から視線を外して私の顔を見た。

「アルワコとコギは昔は同じ先住民だったけど今は違う」

昨日は挨拶程度のみで距離感があった首長が、今日は饒舌だ。彼によれば、対岸にはアルワコという先住民が20人ほど住んでいるという。民族服も見た目も微妙に似ているが、言語は違う。家畜もコギは牛や馬が主流だが、アルワコはそれらにくわえて山羊を持っている。その山羊が一頭消えて、コギの仕業ではないかと言われてトラブルになった。逆にコギの牛が消えたときはアルワコを疑った。そんなことが何年も前からいくつも積み重なっているが、もとは同じ先住民で、今も信仰の対象は同じだ。

彼らは共に「セジャンクワ」というコロンビア北部の森の神を崇め、年に数回、呼び起こす儀式をしているという。この村の空間には異界に通じる裂け目のようなものがあり、神との交信が可能なのか。ふとそんなイメージを膨らませて、興奮しながら私は尋ねた。

「その儀式を見ることはできますか？」

首長はゆっくりと首を横に振った。

後日、パロミノの町に降りて前出のパトリシアさんにそのことを尋ねると、儀式を撮影した動画を見せてくれた。

今となっては少しうる覚えだが、森の中の大きな木の前に数人の大人の男性が立っていた。木に背を向けた首長は目をつむって陶酔感に浸りながら低い声で呪文を唱えていた。が、やがて精根尽きて倒れ込んでしまう、という内容だった。同じようなものはユーチューブにも上がっているが、いつか生で見てみたいものである。

空は徐々に桃色に変わり始め、黄金色の光がじんわりと横に広がっていた。ほかの村人もぼつぼつと水浴びにやってきた。若い主婦たちも川の中にせり出している大きな岩に民族服を投げ出して黒い髪を洗い出した。私がいることも構わずに、豊満な肢体を惜しげもなく晒して腕や足や髪毛を洗っている。そんな光景を2人で眺めながら、「次はいつ来るんだ？」と首長がぼつりと言った。次？ そんなことはまったく考えていなかった。3日後に帰ることもまだ告げていない。だが首長は意味ありげな笑いを浮かべて低い声で言った。

「昨日、君が持っていたバック、あれと同じものが欲しい。今度来るときに持ってきてくれないか。

我々は代わりに君にたくさんの農作物と手編みのバ

ックを用意しておこう」

私が出ているのは肩から斜めにかかる何の変哲もない中国製のショルダーバッグである。昨日の挨拶のときに抜け目なく見ていたらしい。

「いつになるか分からないから、約束はできない」「構わないよ。我々は100年でも200年でも君のことを待っている」

首長は真剣な眼差しを向けたあと、ふっと微笑を漏らした。200年後はさすがに大袈裟だが、20年後、30年後に私が再び訪ねても、時間が止まったように同じ光景が広がっているだろうことは想像できた。

ようやく差し込み始めた日射しが川面に碎け始めた。私の存在など構わず裸のまま水浴びに興じる人たちがまぶしく見えた。人の経歴や立場なんてちっぽけなものだと吹き飛ばしてしまうような人間らしい営みだった。生きるということはこういうことなんだと教えてもらったような気がした。なんて美しいんだろうと思いながら私はその光景を見続けた。

1978年長野県生まれ。2007年からコロンビアへ。首都ボゴタのレストランで手伝いをしながら、全国33県のうち25県を回る。好きな場所はクナ民族が住むパナマとの国境、チョコ州(choco) アルキア (arquía) 村。

# 社会運動に敵対する“市民革命”

ラウル・シベチ 訳：一井不二夫

エクアドルの中心的な先住民組織であるコナイエを、その建物から追放しようとするラファエル・コリア政府の試みは、彼が推進する「市民革命」の持つ矛盾をあらわにした。この国で現在おこなわれている、鉱山、石油、巨大水力発電所に代表される新開発主義は、ブエン・ビビル「良く生きる」の旗印の下に隠されている。

コナイエはエクアドルでもっとも重要な社会組織であり、1991年当時のロドリゴ・ボルハ大統領との取り決め以来、キト市北部に本部を構えてきた。コナイエは、1990年6月より数々の蜂起を主導し国を麻痺させることによって、政治課題の中心に先住民の要求を置くことに成功してきた。コナイエはシエラ[山地]、セルバ[熱帯]、コスタ[海岸]地方の5000以上の共同体を結集させ、1997年のアブダラ・ブカラム政府、2000年1月のハミル・マウア政府を打倒するのに重要な役割を果たした。

エクアドルで新自由主義モデルの不当性を追及する先住民と民衆の役割は際立ったもので、これがコリア政権の登場と新憲法の制定(2008)を準備することになる。だが2007年以来、コリアは議会の多数を支配し、司法権力をも政権を支持するものにした。

コナイエは、この建物は国家から歴史的な補償の一部として提供されたものであり、使用契約が2021年まで有効であると主張している。が、政府は1月6日に強制退去させようとしていた。1月初旬、先住民によるこの場所を守るための動員と、国際的な批判により、政府は強制退去を2か月間延期することにした。

## コリアにとって悪い年

コリアと社会運動との関係は、最初から良いものではなかった。2009年3月、政府は20年間活動してきた環境NGOアクション・エコロヒカの法人格を、「創立時の目的を達していない」という理由でなく奪した。が、エドゥアルド・ガリアノなど広範な国

際的連帯の働きかけが、大統領にこの措置を撤回させた。

200人近い先住民の指導者、活動家が秩序紊乱あるいはテロリズムによって告発されている。これまで新自由主義モデルに反対して行ってきた同じ手段（道路封鎖、市場麻痺、行進、抗議行動）を行使したためであるが、まさにこれらの行動によって現在の政府は政権を得ることができたのである。相互の敵対心は最近数年間でさらに悪化した。さらにここ数カ月、この関係は弾圧と迫害を含んだものへと発展したが、それは2014年がコリアにとって悪い年だったからだ。「ヤスニ・イニシアティブ」の幕引きは、国立公園を守ろうという広範な社会運動を引き起こしたし、選挙での予期せぬ敗北を蒙り、社会的抗議は目覚ましく成長した。

政府は「ヤスニ・イニシアティブ」を中断した。これは、ヤスニ国立公園での石油採掘を停止することによって、地球温暖化にたいする国の義務を果たそうというものだった。そしてその石油採掘から得られる収入は国際社会からの拠出で賄うことになっていた。2013年8月15日、政府が中止を決定した時、ヤスニドス運動はこの是非を国民投票にかけるために70万人の署名を集めた。運動への誹謗中傷から直接的な不正まであらゆる手段での妨害工作があったが、それにもかかわらずヤスニドス運動は、国民投票を実施するために必要な署名を5%上回る数を集めたのだった。

が、提出された署名簿は軍の兵舎に運び込まれ、その後、全国選挙評議会は署名確認作業へのヤスニドスの立ち入りを最小限に押さえて、大量の署名を振り落とししていった。結果的に多数の署名が無効とされ、国民投票を実施することはできなかった。

## 選挙での敗北と労働法への抗議

政府は2014年、地方選挙で初めて重要な敗北を喫し、権力を失う危機感を持った。コリアの党である

アリアンサ・パイス[祖国同盟]は首都キト、グアジャキル、クエンカの主要3都市で敗北し、これまで政府の基盤であったシエラ[アンデス]でも後退した。キトでの与党候補（アウグスト・ベレラ）の敗北は衝撃的であった。中道右派であるマウリシオ・ロダスに20ポイントもの差をつけられたのである。しかも首都はずっと与党が取ってきたところであり、政府が膨大な資力と組織をつぎ込んだにもかかわらず、の敗北であった。鉱山地域や石油開発地域でも敗北したうえに、シエラでも後退することになったのだ。

政府は10の県都において敗北したが、市長レベルでの後退はより大きい。2009年に勝利した73の市長のうち、維持することができたのは65のみだった。コスタ[海岸部]においては前進したが、シエラにおいては36から14の市長に後退した。今回の選挙で政府は「戦略的失敗」を蒙ったとし、現体制が主導権を失うかもしれないという意見もある。民衆・先住民セクターからの歴史的な要求に基づいた、国家の構造的な変化が行われていないことが選挙に影響し、その敗北を決定したからである。

コナイエと労働者統一戦線（FUT）による、労働法制改革にたいする2014年11月の大規模な抗議行動は、政府を警戒させた。労働法改革は公務員の労働組合結成を禁止しており、この動員は団結権、特に公務員の団結権を守るためのものだった。参加者の多くは、コレアが憲法改正をして大統領再選を可能にしようとしていることにも反対している。最近の現政権の強圧的なやり方は、昨年12月4日に、ドイツの議員団がヤス国立公園などエクアドルのプロジェクトの視察のために入国しようとしたのを外務省が拒否したことに現れている。

## 経済危機と左翼の人種差別主義

2014年6月、エクアドルはゴールドマン・サックスにたいして、4億ドルの融資のために、自国の金の埋蔵量の半分を担保として差し出した。これによりエクアドルは国際金融機関への依存に戻ることになる。政府は資金を必要としている。そのなかには

7億ドルの外国への支払いと水力発電に投資する10億ドルも含まれる。国際経済の変化は、これまで以上にラテンアメリカの経済にたいして打撃を与えている。エクアドルは現在もっとも影響を受けている国の一つで、石油価格の下落は深刻な問題だ。

このような悪条件のなかで、政府は国内の運動に終止符を打とうとしている。政府は民衆・先住民・農民の共同体、環境保護団体を敵と見なすようになった。社会運動は、この政権の近代化、開発主義プロジェクト、とりわけ鉱山と石油開発の分野において、「障害物」に変わったのである。

## 社会組織にたいするコントロール

2013年6月4日、コレアは大統領布告16号を発出した。これは社会組織の活動を、社会組織情報統合システムと、社会組織単一登録によって規制するものだ。運動団体は今後政府の承認なくして存在できず、申告した目的から外れた場合には、解散させられることもある。実際、第43条は組織にたいしてあらゆる情報の更新を義務付けているし、第40条では大会議事録、会計報告、要求される情報すべてを政府に提出することを義務付けている。また第26条は、政府によって創立された組織とその基準に従うもののみが公共の活動に関わることができるとされている。この布告の内容とエクアドル国家のやり方は、社会と社会組織の自治を弱体化させるための統制だと言える。この布告は、いかなる対話も相談もなく、大統領令によって実施されたもので、市民社会が全体として持っている自決の能力を否定し、民主主義社会の基本的原則を傷つけ、しかも憲法違反であると批判されている。

このようにして数千の先住民共同体、数万の社会組織が国家の統制に置かれることになった。ラファエル・コレアとアリアンサ・パイスの政権誕生は、これら運動体の闘いのおかげで可能となったのだが、いまこれらの運動体は犯罪組織と見なされ、統制されている。ここではフランス革命以来2世紀以上の古い歴史が繰り返されている。<新しい権力は、それを可能にしたものを食い尽くす>

## マルティン・ゲバラ初来日

### チェ・ゲバラとキューバ革命、二つの「神話」の暗部をえぐり出す

松枝 愛(翻訳家)

キューバ革命の英雄、エルネスト・チェ・ゲバラには妹と弟が2人ずついるが、思想的に彼と最も近いのは、末っ子で15歳年下のファンニマルティン・ゲバラ(71)と言われる。ファンニマルティンは兄の遺志を引き継ぐ形でアルゼンチンの革命実現を目指し、家族をキューバに移住させてひとりブエノスアイレスに残り地下活動を続け、投獄、8年半にわたる服役などを経験した人物だ。彼の長男で、スペイン在住の作家マルティン・ゲバラ(51)が、前年5月に米国で出版され話題になった自著を携え、今年1月末に来日した。筆者は同氏の到着翌日に会見したほか、東京・目黒で行われたイベントで話を聞いた。

マルティンが来日した主な目的は、著書“A la sombra de un mito(『ある神話の陰で』未邦訳)”を紹介し、日本語版の出版につなげることだ。著書は革命後のキューバで思春期を送った彼が、「チェのようになろう」というスローガンに苦しめられ身を崩した過去と革命政権を国内から批判する内容となっており、これまでスペイン語から英語やスウェーデン語に翻訳されるなど、反響を呼んでいる。

マルティンは1973年(10歳)からの9年間と、86年(23歳)からの2年間を母と弟と共にキューバで過ごした。革命政権下の社会は、マルティンにとって矛盾だらけだった。チェの親族に保証された「VIP 待遇」の何不自由ない生活を、純粋に少年として楽しんだものの、周りを見渡せばアルゼンチンよりも劣悪な環境で人々は暮らしていた。伯父は全人類の平等のために戦って死んだのではなかったか。その後入学したベカと呼ばれる寄宿制の学校は、革命精神を普及させる社会政策の一環で設けられた教育制度だが、そこで勤労奉仕を強制された日々は自由を奪われ獄中にいるようだった。15歳から酒やタバコに手を出し始めた。勉強も仕事もせず酒におぼれていた21歳の時、父親のいるブエノスアイレスに住まいを移し2年間を過ごす。そこでは一転、父親と書店を営み至極全うな日々を送った。しかしキューバに舞い戻ると再び自堕落な生活に陥り、チェの甥としての「模範」を勤められないかどで2年後に国外追放された。

以降、自分がチェの甥であることを封印し、民芸品を売り歩くなどして生計を立てていく中で家庭を築き、スペインに移住し、現在に至る。20年以上経てやっと、英雄の伯父の重圧から解放され、よりよい世界を目指す「同志」として、伯父と向き合うことができるようになったと言う。9日間の訪日中には京都と広島まで精力的に足を伸ばし、半世紀前の伯父の足跡を辿った。

親族同士が金儲けにチェを利用しているなどと争い分裂してしまったり、チェの血を継ぐ子や孫がどんなに有能であろうと結局は「チェ・ゲバラの誰々」として扱われる現実を嘆いたりすることもあったが、今は極力気にしない。英雄の親族として特権を受けた過去、伯父の重圧に苛まれた過去、革命政権下のキューバに生きた過去は、自らにしか描けないテーマだという確信に至った。そして、ポスト革命世代の芸術活動が偏向していて乏しいと憂慮するキューバ時代の友人たちが、執筆を後押ししてくれたのが何よりの励みだと言う。

神話化するチェ・ゲバラとキューバ革命。二つの大なる存在が身にのしかかり人生を揺さぶられた実体験を持つマルティンだからこそ語れる証言であり、その言葉には重みがあった。原書はAmazonで入手可能。



(2月1日、目黒でのイベントで松枝愛撮影)

## トロマタ事始

アフロペルー音楽でもっとも有名な曲を1曲だけ挙げよ、と言われれば何の曲をあげるだろうか。おそらく、ほとんどの人が「トロマタ」を挙げるだろう。「牛殺し」という物騒な意味のこの曲が、アフロペルー音楽でもっとも世界的に有名な一曲であることは間違いない。

そもそも、トロマタは、カニエテやチンチャなどのアフロペルー集落に残っていたとされ(またリマにもあったとする説もある)、様々な歌詞や曲のバリエーションがあった音楽だ。そしてトロマタの「牛殺し」の歌とはつまるところ、闘牛の歌であった。アフロ系住民の闘牛への参加の歴史は古く、18世紀以降、断続的に黒人闘牛士が登場していたようで、彼らの名前が記録に残っている。彼らが当時どのような立場でマタドールとして活躍したのかは分からないが、これらの影響もあって、トロマタという芸能が生まれてきたようだ。

現在、トロマタはランドーとして踊られることが多い。しかしリマのアフロ系クリオーヨの長老であったアウグスト・アスクエスによれば、トロマタの踊りとは本来、男女の恋の踊りで、女性がマタドール役を、男性が雄牛役をする踊りであった、という。今のトロマタの音楽では、牛の真似をした男が女の子に突っ込んでひらりとかわされる踊りが全くしっくり来ないが、これは音楽自体が別物に変わってしまっているからだろう。

このトロマタについて、最初に記録を残しているのは、リマの女流ピアニストで作曲家のロサ・メルセデス・アヤルサ・デ・モラレスだ。彼女が1937年に発表した

『リマの古きプレゴン(物売り歌)たち』の中では、ゆったりとした哀歌ラメントとしてトロマタは掲載されていた。これがおそらく記録に残るもっとも古

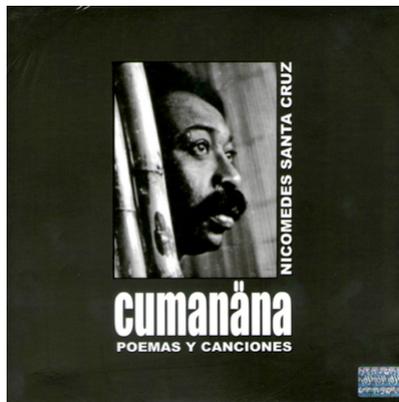
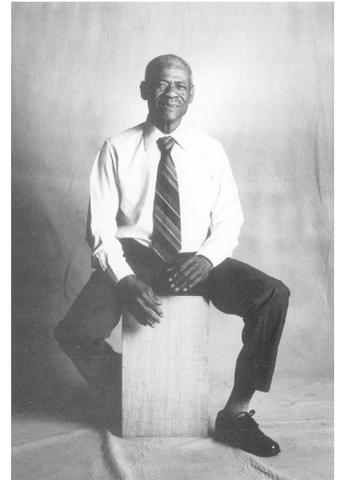
いトロマタであった。しかし、ラメントでも闘牛踊りは出来ないもので、この時点ですでに変化していたのか、もしくは逆にアスクエス氏の記憶よりも古い時代のものではなかったのかはしれない。

そしてその次にトロマタを取り上げたのが1956年にアフロペルー音楽復興の最初の狼煙を揚げたまぼろし的一座「パンチョ・フィエロ座」であった。白人歴史学者ホセ・ドゥラン教授がリマに流入してきたアフロ系住民やリマのバリオに住んでいたアフロ系住民を集めて「古き良きリマの生活」をテーマにアフロ音楽と踊り、朗読詩などを中心に演出して行った興業だ。ここでも演目名以上にデータがなく、トロマタがどのように演じられたかについては残念ながらわからない。ちなみにカイトロ・ソトはこの公演でも中心的存在として活躍しており、

ここでのトロマタ体験が後のカイトロ版トロマタの発表につながっていたことを踏まえると、ある程度近いものだった可能性は高いだろう。

さらに1964年には、アフロペルー音楽復興の最重要人物の一人ニコメデス・サンタ・クルスの金字塔とも言える作品『クマナナ』の中にトロマタは登場している。こちらはパナリビオという南部のアフロ系リズムにのせて歌われている。曲のタイ

トルは「Ahi viene mi caporal」である。牧歌的なハバネラ調のゆったりとしたリズムにのせて歌われるそれは、闘牛踊りはしっくりくるわけでもないが、



同時にカイトロ・ソトのトロマタのような力強さもない。むしろ、とことん脱力系トロマタといってもいいものである。

このように、カイトロ・ソトがトロマタを録音するまでも、繰り返し繰り返し、トロマタは登場していた。もしかするとカイトロ・ソトとペルー・ネグロによるトロマタがあまりに強いインパクトを持ちすぎてしまったことで、これらさまざまなトロマタがすべて駆逐されてしまったのかもしれない。

それでは、満を持してカイトロ・ソトのトロマタについて見たい。

1973年にカイトロ・ソトが収集・編曲して発表したトロマタは、非常にインパクトのある、魂をも揺さぶるような力強い曲へと生まれ変わっていた。しかし、そこで歌われる歌詞は、黒人マタドールの辛さ、陰口などが主なテーマだ。「雄牛を殺せたのは、もう明日にも死にそうなおいぼれ牛だったからさ」と、たとえ活躍しても、黒人マタドールは必ずしもいい顔をされなかった悲しい現実がそこでは歌われている。

カイトロ・ソトのトロマタの大きな特徴の一つは、後半にフーガとしてフェステホが加えられていることである。このフェステホはカニエテに古くから伝わるもともとまったく関係のなかったフェステホであるが、今やこのフェステホのフーガなしにトロマタは完成し得ないといっても過言ではないほど、なくてはならないものとなっている。

カイトロ・ソト自身について説明するのを忘れていた。カルロス・"カイトロ"・ソト・デ・ラ・コリーナ、通称カイトロ・ソトは当時最高のカホン奏者の一人であり、パンチョ・フィエロ座時代より常に最前線でアフロペルー音楽の新しい世界を切り開いてきた一人だ。1934年にカニエテで生まれ、7歳で父を失ったのをきっかけでリマへと出てきた。初期のペルー・ネグロのメンバーとして活躍し、さらにそのパトロンであったチャブーカ・グランダに「息子」と愛され、常に彼女のステージに呼ばれカホンを叩き続けたという特異な経歴を持つ(ちなみにチャブーカ・グランダのアルバムにも、カイトロ・ソト

が歌うトロマタが普通に入っている)。また、彼がパコ・デ・ルシアにカホンをプレゼントしたことによって、フラメンコにカホンが導入されるようになった。

カイトロ版トロマタが世に出て以来、録音されるトロマタはすべてカイトロ版のコピーとなった。彼のトロマタがそれほど素晴らしかったというのはもちろんのこと、トロマタ自体がアフロペルー音楽で最も名の売れた曲となったことによって、トロマタ需要が一気に高まったのであろう。



さて、もう一曲、別のトロマタの話をして。スサナ・バカが1992年に出した渾身の作品に『火と水から』というものがある。この作品は彼女の作品の中でも異彩を放つアルバムで、数十ページに渡る詳細なアフロペルーの歴史と文化、そして音楽についての非常に詳細な解説が付いている作品だ。いわば、スサナ版『クマナナ』がこの『火と水から』というわけだ。このアルバムの中で、スサナは彼女自身が採集したトロマタを歌っている。ペルーとチリとが戦った19世紀末の通称「太平洋戦争」の歌詞が登場するなどなかなか衝撃的なトロマタであるが、まだこのようなトロマタが眠っていたのかと、初めて聴いた時には心底ドキドキした記憶がある。彼女曰く、ここには4つのスタイルのトロマタをミックスして一曲としているそうだ。このアルバムのオリジナル版はおそらくもう入手不可能だが、廉価版なら探せばまだ手に入ると思うので、ぜひ聴いてほしいと思うトロマタである。時代の中で変遷を重ねてきたトロマタ。そんないろんなトロマタをぜひ一度聴いてほしい。

ミゲル先生のメキシコ食巡り  
カボチャのクリームスープ

Sopa Crema de Calabaza

トウモロコシやフリホール（インゲン豆）、チョコレート、トマト、アボカド、トウガラシとともに、カボチャの起源は約9000年前にさかのぼりません。

現在のグアテマラ（1823年にメキシコから独立）やホンジュラス、コスタリカ、ニカラグアという国になっている中央アメリカではそのころから栽培されており、メキシコでも、チアパスやオアハカ、タバスコ、カンペチェ、ユカタンなどで同時期からつくられていました。

マヤ民族は、実にさまざまな形にカボチャを料理して必要な栄養をとってきました。

たとえばPAPADZULESという料理は、ゆで卵を刻んだものをトルティーヤで包み、カボチャの種子をペースト状にしたソースをかけています。

種子では、多彩なデザートもつくられ、今ではマヤだけの伝統料理というより、あらゆる層の人々が楽しんでいます。

カボチャには、形や色、味、かたさが異なる数多くの品種があります。安くておいしくて健康的なメキシコのカボチャは日本にも輸出されています。



私が子どものころ、母はカボチャをスープにしたり、肉と一緒にフライにしたり、ほかの野菜と盛り合わせたり、お菓子にしたりしてくれました。種子も塩とトウガラシで味を付けて食べさせてくれました。

カボチャはその薬効でも知られています。マヤの人々は、発熱や腹痛のときに、種子を煎じて濾したものを1日に2、3回服用していました。

科学的な分析によると、カボチャは利尿作用があり、前立腺などの病気によいとされています。

きょうの料理はカボチャのクリームスープです。

.....

■材料 4人分

- ・カボチャ 1/2
- ・牛乳 500ミリリットル
- ・生クリーム（小）1パック
- ・水1リットル
- ・クルトン

■作り方

- 1) カボチャを5センチ角に切る。
- 2) 切ったカボチャを鍋に入れてよく煮る。あまりやわらかくなりすぎないように。

- 3) カボチャを湯からとりだし、皿の上でさます
- 4) 皮だけが残るようにスプーンでやわらかい部分をとる。お好みならば、皮はほかのスープの具などにつかってもよい。今回はやわらかい部分だけを利用する。
- 5) 皮からはずしたやわらかい部分をミキサーにいれて、牛乳とクリームを加え、黄色くなるまでよく攪拌する。
- 6) できたものを別の鍋に入れて、弱火で8～10分煮る。ただし、吹きこぼれたり焦げたりしないようによくまぜながら火を通す。
- 7) 茶碗か深皿に入れて、クルトンをトッピングする。

## チリ 反テロリスト法の濫用で広がる人権侵害

政治的権利、文化的権利、そしてテリトリーを回復しようとする運動と資源開発に反対する人々への弾圧がチリで広がっている。政府は彼らを「内部の敵」と呼び、「反テロリスト法」を適用してリーダーらを逮捕、裁判にかけている。マプーチェ先住民の土地回復の要求、森林伐採の企業との土地争いは進歩への障害とされ、法治国家と統一国家への脅威と見なされる。環境保護運動や学生運動の動員はつねに警察の監視対象となる。マプーチェ人が住むビオビオ州など土地問題がある地域は軍事化されている。最近では、チリ北部のコキンボ州チョアパ渓谷では鉱山開発のために水が汚染され住民の飲み水がない状態になっているが、最高裁が鉱山開発会社に対して変更した川の流れを元に戻すようにという判決を出したにもかかわらず、それが守られていない。そのため住民は鉱山ダムに続く道路を3カ月封鎖するという実力行使にでざるをえなかった。昨年12月にはコミュニティの代表が無実の罪で逮捕され嫌がらせを受けたほか、今年3月には、デモをした村人の一団が襲われ、多くのけが人がでて、1人は警官の空気銃で片目を失った。

アラウカニア州でマプーチェ民族が自分たちの土地を回復したエルシージャでは、コミュニティのメンバーへの警察による不法逮捕や夜間の家宅捜索などが行われている。小さな子どもまでもが逮捕され手錠や足かせをはめられて拘留された。これは最高裁で子どもたちに無罪を言い渡す判決が出たばかり。民族の政治的文化的な権利、そして土地の権利を守ろうとして逮捕され、裁判にかけられるマプーチェの活動家は国連人権高等弁務官事務所により「政治犯」と認められている。米州人権裁判所は昨年、チリ国家に対して、マプーチェ民族の活動家がテロリストとして逮捕され裁判にかけられ有罪になった事件で、適正な法手続きがされておらず、彼らに対する人権侵害があったと判決した。学生運動家がねつ造された証拠で有罪判決を受け16ヶ月刑務所に拘留されていたケースも報告されている。国連人権委員会からも2014年にこの法律の運用に反対する勧告が出ている。「反テロリスト法」はピノチェット独裁政権時代に制定された法律だが、現バチェレ政権はこの法の運用を変えようとはしていない。(Noticias Aliadas. 25/03/2015)

## グアテマラ、ニカラグア ジャーナリストが標的に

ラテンアメリカ・ジャーナリスト連合(FEPALC)と国際ジャーナリスト連合(FIP)は3月19日グアテマラとホンジュラスで起こったジャーナリスト殺害を非難する声明を出した。両国では今年1月から3月までに各3名、計6人のジャーナリストが殺害されている。声明は、中米では「政治権力を持つセクターと組織犯罪が共存しており、多くの場合、彼らの腐敗を暴き司法の場で究明することができない(いずれの国も犯罪の95%は不処罰)その責任追及を試みるジャーナリストを攻撃する」としている。(Noticias Aliadas 25/03/2015)

## ブラジル ルセフ政権への抗議とリオ・オリンピック反対運動たかまる

ブラジルは国営石油企業のペトロブラス社の大規模な贈収賄スキャンダルでゆれている。アクレ州とリオ・デ・ジャネイロ州知事をはじめ、47人の政治家が関わっていることが判明しているが、政治家の大部分は与党労働党の関係者だ。ブラジルの経済状況も低迷していることから現ルセフ政権に対する批判が噴出ししている。3月15日にはブラジル各都市で大規模な抗議デモが行われた。

また、2016年の夏期オリンピックが開催されることになっているリオ・デ・ジャネイロでは、オリンピックの開催に反対する運動もたかまっている。さる3月の国際オリンピック委員会の会議はそのために中断された。ヨット競技施設での水汚染や、ゴルフ競技場のための森林伐採などで環境が破壊されているというのがその理由。(BBC Mundo.com 3/1/2015、3/15/2015)

2014年4月に転勤で鳥取市に移り、1年が経ちました。仕事の都合上、休日でも鳥取県外には出づらく、レコムの活動にほとんど参加できなくなってしまい、他のメンバーに申し訳なく思っています▼その鳥取ですが、人口最少の県であることに加え、アピール好きな知事の言動で全国に発信するニュースも少なくありません（お陰で私の仕事も増えています）。住民としては海と山が近くて変化に富み、地元産の魚介や野菜を安く味わえることが特長です▼鳥取に移るまで12年間、首都圏と関西で暮らし、レコムの仲間が身近にいました。そんな環境から離れての活動ですが、同じように地方で暮らす会員はたくさんおられますね。インターネットなどでラテンアメリカと直接つながれるのはもちろんですが、鳥取の地でも関心を寄せる人たちと出会い、イベントなど交流する機会を創っていきたいと思っています。

(太田裕之)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で7月11日（土）、  
 発送は関西で7月18日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org)までアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.151 メキシコ・ナルコ回廊

Vol.150 メキシコのアフリカ系

Vol.149 コロンビア・アワ民族

Vol.148 ナルコ・メヒコ

Vol.147 サパティスタ武装蜂起20年

Vol.146 グアテマラ視察報告

Vol.145 アフリカ系パラグアイ人の今

Vol.144 ブラジル・家族農業の危機

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて [recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

### レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も

しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

25万4945円

<グアテマラ基金>

124万1363円

(2015年4月現在)